蒼天句会

毎月第二木曜日午後一時から
於　美浜公民館

講師	ひらがなで来る招待状七五三	明海	栗原公子
	新米の豊かなる湯気仏前に		
一	伸子張り潜つて遊ぶ子水温む	高洲	北　洋一
	服薬の一錠雫す歳の暮		
二	能登の田にそそぐ水音夏近し	舞浜	上野賢一
	異常なし病窓越しの五月富士		
三	お堀端風に煽られ花筏	入船	菅　隆彦
	峡谷のトロッコ抜ける五月風		
四	三番瀬の波の煌めき春浅し	美浜	三浦詔子
	鶯の鳴き声真似て杣の道		
五	蝉時雨ピクリとうごく犬の耳	入船	近藤信江
	朗読の声清々し夏椿		
六	病棟の子には遠くの秋の空	美浜	宮崎晴代
	日傘差す卒寿の母の頼もしき		
七	円相は一気呵成に蝉時雨	猫実	茂原朱美
	薫風やいつか出て来る捜しもの		
八	儚さと艶やかさあり和の花火	入船	新井婦紗子
	花菖蒲江戸紫の立ち姿		
九	爽やかに潮の匂いに三番瀬	美浜	江戸繁一
	長き夜や友と明日立つ旅支度		
十	春夕焼もうろう体の東京湾	美浜	和田久恵
	長き夜のねむりは深し転居あと		
十一	卯の花や介護の妹の長電話	北栄	柴　鎮夫
	古き絵馬成就なりしや遠花火		
十二	さくらんぼふふめば誰もおちょぼ口	日の出	佐々木静江
	長き夜や深き闇ある読書灯		
十三	春めくやキリンは空に首を延べ	日の出	外園重子
	青梅に日ごと充ちくる力あり		
十四	句座解けて地酒新蕎麦笑ひの輪	船橋	下嶋国祥
	浦安へ辛夷に会ひに句帳下げ		
十五	想ひ出は消えず真冬の昼の月	入船	大西孝志
	炎立つごとし夕日の枯すすき		